

工学院大学学長

水野 明哲氏
あきさと

学園祭でたまたま手に取った尺八が面白そうだと思い、東京大学3年の終わりに尺八部に入部した。そこで、素晴らしい師匠に出会う。尺八界の大御所で、人間国宝であった故山口五郎師である。

◇ 五郎師は言葉で教えない先生であった。いつも一緒に吹いて下さり、練習が終わると、「はい、今日はここまでにしましょう」でしめる。あるお弟子さんは「月謝泥棒」とまで言った。でも、音楽は言い表せないことがある。私は師匠と吹き合いながら、会話をしていたのだと勝手に解釈している。

尺八を始めて40年以上、もう体の一部のようなものだ。「首振り三年ころ八年」と言うが、芸事には年季が要る。あまり練習しなかった年でも、1年たてばそれなりの進歩があ

尺八の音色、弟子に伝える

る。10年前の音色とは全く違う。

尺八は非常に奥が深く、難しい。だからのめり込んでしま

いい尺八はいい音色を出すのか、というところではない。吹き方で決まる部分が大



り込んでしまった。一応プロフェッショナルというところにしており、尺八が本業だろう」なんて言われることもある。毎年、京都で琴の演奏家などコンサートを開く。外国でも演奏するが、これは大いに喜ばれる。私の専門は流体力学だが、尺八の仕組みはまさにこれ。尺八の管の中にあるとがった個所に空気を連続的に吹き付け

四郎管を吹くことで、私は五郎師に加える、四郎先生からも習うことができたと思っている。実はその四郎管は大学生の時に、飲み代の付けがたまっているという後輩から、たった1万円で購入したものだ。現在は、国際色豊かな約15人の弟子たちにも恵まれ、水野香盟の名で週末に教えている。言わないでください、と思いつつ「もうちょっとこうするといんじやないか」と、何だかんだ指導してしまう。それは師匠に習っていないところだ。エンジニアの性かもしれない。

週末は

別人

●京都で開いた古典演奏会(08年8月、右端が尺八師範の水野香盟氏) ●いい音色は吹き方で決まる部分が大



個展を開いた。また1年に数回、個展も開いていた。前回、個展も開いていた。仲が良かったのは郵便局員になった愛知大学の落合智一君、そして見事にプロカメラマンになった皇学館大学の菊谷仁志君。彼らとよほど交流

城大 学

東明工業社長

の宮 啓氏 (43)



を待ちかまえてはシャツを切り取って、いたもの



の大学の専ら。彼らとよほど交流

健

進む米の

「21世紀は」
ことが当たりの
のテーマは認
加齢関連疾患
には、どうす
必要がある」
祖ともいえる
ん(82歳)は
んは、米国立
を尽くし、初
も、国際長春
として、世間
で、活躍する
「人類を自

ポ

SR I
年、発売
ランド社
・RAY
(イオタ
レシヨ
属が埋め
存のパタ
った造り
常、パタ
なものだ
打面には
出ている
リマー樹
いる。「
の転がりの
に役立
報担当者
してくれ